



リレートーク #200



進歩する医療

梅田 一郎

ファイザー
取締役社長

27年前、製薬会社の地方営業所から本社マーケティング部門に異動になった時、初めて担当した製品がリウマチ治療薬でした。当時はリウマチに有効な薬剤が少なく、患者さんは関節の変形や破壊に苦しんでいました。つえ、車いす、日常動作の自助具など、さまざまなものに頼りながら厳しい闘病生活を続け、症状が悪化するとベッドから離れることもできませんでした。

リウマチの坐薬を発売した時には、お尻に手が届かないという患者さんのために、挿入器を開発したこともあります。坐薬を毎日入れてくれていたご主人が入院し、息子さんをお願いしなければならなくなった時、とてもつらい思いをしたという年配女性が、開発の相談に乗っていただきました。

この領域を10年間担当した後、経営企画や人事などの異なる部署を経験し、リウマチから長く遠ざかっていましたが、今年1月に実施されたグローバル組織再編により、リウマチ事業は私の直属部門に置かれ、この疾患について久しぶりに勉強することとなりました。今のリウマチ医療は、私が若かったころとはまったく違います。病気の原因がより深く解明され、痛みや炎症などの症状を抑えるだけでなく、原因に直接作用する薬剤が開発されています。今、新たに罹患する患者さんが適切な治療を受ければ、以前のような関節の変形や破壊もほとんどありません。かつてのリウマチ外来は、一目見て患者さんの厳しい状況が分かる重苦しい空気の漂う場でしたが、患者さんには女性も多く、今は明るさがあります。

かつて会社から慶應義塾大学ビジネス・スクールに派遣された時、ゼミの先生のご指導で、結核をテーマにしたことがあります。手術や薬剤などの医療技術の進歩によって疾患が克服されていく中で、薬剤需要がどのように変化していくかを調べました。

今でも結核は侮れない疾患ですが、国民病と言われ多くの悲劇の物語が書かれた時代とは事情がまったく異なり、克服できる疾患です。調査した当時は、結核が克服されたのはまれな例かと思っていましたが、今振り返れば、結核のように克服できるようになった病気がたくさん増えました。リウマチは、医学、診療上の本当に難しいところはまだこれからだと言われます。しかし、患者さんの生活は以前とまったく変わっており、克服に向かって大きく進みつつある病気の一つだと思います。

超高齢社会を迎え、医療費の増加が議論されています。医療技術、医薬品、医療機器等の進歩を妨げることなく、国や国民が負担可能な制度を作っていくことは、日本にとって大きなチャレンジです。しかしこれは世界のチャレンジでもあります。日本からベストプラクティスが発信されていくよう、経済同友会においても議論が深まっていくことを期待しています。